

小泉八雲作

# 鮫人の恩返し

朗読

近江千恵子



小泉八雲（こいずみ やくも）

小泉八雲の履歴については「ちんちん小袴」の項参照。

本編は「琵琶湖の畔に住む俵屋藤太郎が、ある日、竜宮を追われた鮫人を助け世話を  
する。やがて藤太郎はふと出会った娘に一目惚れし重い恋の病に陥る。だがその病は  
薬では治らないと医者に言われるが、竜宮を思い出して泣く鮫人の流す涙に救われ  
る」という内容。その涙の正体とは何か。藤太郎の恋した女の両親は結納金として莫大な財宝を要  
求したが、そんな財宝は尋常なことでは手に入らない。それを適えたのが藤太郎に命を救ってもら  
った鮫人の涙、その涙はたちまちのうちに宝玉に変わったのである。発表は1899年（明治32）。

「用語解説」

八大竜王（はちだいいりゅうおう）

法華経の会座に列した護法の竜神。水の神、雨乞いの神と  
もされる。八大竜神

瑯琊王伯与（ろうややおうはくよ）

瑯琊は中国の古地名で現在の山東省南西部で黄海を望む  
高台。伯与は瑯琊国の王の名前

むかし近江おうみの国に、俵屋藤太郎たわらやとうたろうという人が住んでいた。家は、石山寺いしやまでらという名高い寺からさして遠くない、琵琶湖びわこの岸にあつた。相当の財産もあり、なに不自由なく暮していた。が、二十九歳になつても、まだ独身であつた。彼の最大の野心は、非常に美しい女と結婚することであつた。ところが、気に入つた娘をなかなか見つけることができなかったのである。

ある日、瀬田の長橋にさしかかると、妙なものが、欄干のそばにうづくまっているのが見えた。その生き物は人間のからだに似ていたが、墨のようにまっ黒であつた。顔は鬼のようである。目は緑柱エメラルド石のように緑いろで、髯ひげは竜りゆうのよう。藤太郎は、最初ひどく驚いた。が、彼を見つめるその緑いろの目が、いかにもやさしそうだったので、ちよつとためらつたあと、思いきつてその生き物に訊たずねた。すると、それはこう答えた、「わたく

しは鮫人こうじんです——あの海の鮫人さめにんげん間でございませう。つい先ごろまで、竜宮りゅうぐうの下つした端役人はとして八大竜王に仕えておりました。ところが、ちよつとした過ちのため、竜宮を追われ、海からも放逐されることになりました。それ以来、わたくしは——食べる物を手に入れることができず、寝る場所もなく——この辺りをさまよいつづけております。どうか、このわたくしをあわれと思し召おぼめされるなら、宿る所を見つけ、なにか食べる物をお恵みくださいませ！」

こうしていかにも悲しげな口調で、恐る恐る嘆願されたので、藤太郎はひどく心を動かされた。「いつしよに来るがよい」彼はいった。「庭に大きな深い池があるから、いつまでもそこに、好きなだけいたらよかろう。食べる物もたつぷりやるから」

鮫人は、藤太郎の家へついて行ったが、その池がよほど気に入ったらしかった。

それ以後、ほとんど半年ばかり、この奇妙な客はその池に棲すんで、藤太郎から海の生き

物の好みそうなものを、毎日食べさせてもらっていた。

さて、その年も七月、近くの大津の町の、三井寺といみいでらう大きな寺に、女にょにんもうで人詣があつた。藤太郎もそれに詣でるため、大津に出かけた。そこに集まってきた大勢の女や娘たちのなかに、まれに見る美しい人を見つけた。年のころは十六ばかり。顔は雪のように白く、上品であつた。口もとの愛らしさは見る人に、その声が「梅の木に鳴くうぐいす 鶯」の声のごとくうるわしく」聞えたであらうと思わせるものがあつた。藤太郎は、ひと目で彼女が好きになつた。彼女が寺から出て行くので、適当な距離をたもちつつあとをつけて行くと、彼女は母親といっしよに、近くの瀬田の村の、ある屋敷に数日のあいだとつりゆう逗留していることがわかつた。村の連中に訊ねて、彼女の名が珠名たまなであり、まだ独り身であること、そして両親が、結納として一万の宝玉をおさめた箱を要求していたので、娘を並みの身分の

者へはやりたがっていないように思われることを知ることができた。

藤太郎はそうと知って、すっかり気落ちして家に帰った。娘の両親の要求している奇妙な結納のことを考えれば考えるほど、彼女を妻として迎えることは、とうてい望めるように思えなかった。たとえ国中に一万もの宝玉があるにしても、大名でもなければ、それを手に入れることは期待できなかつたのである。

が、ほんのひととき一刻も、藤太郎はその美しい娘のひと おもかげ面影を忘れることができなかつた。寝食もできないほど、その面影が彼の頭からはなれなかつた。そうして日のたつにつれ、

それはますます鮮明になってくるように思われた。で、とうとう、彼は病気になつた——  
まくら枕から頭も起せないほどの病気になつたのである。そこで彼は、医師を呼んだ。

医師はていねいに診たあと、驚きの声をあげた。「どんな病気でも、まず医者な おの適当な手当てで癒な おるものだが、恋の病だけは別です。あなたの病気はあきらかにこいわずらい恋煩こいわずらいいです。

それには癒しようがありません。ずっとむかし、瑯琊王伯与ろうやおうはくよはこの病で死にました。あなたもその人のように、死ぬ覚悟をしなければなりません」  
そういつて医師は、藤太郎に薬もやらずに、立ち去った。

そのころ、庭の池に棲んでいる鮫人は、主人の病氣のことを聞き、藤太郎の世話をするために家の中にはいつてきた。そして、夜となく昼となく、こころをこめて看病した。しかし彼は、その病氣の原因はおろか重態であることも知らなかった。が、一週間ばかりすると、藤太郎は死期のせまったことを感じて、こんな別れの言葉を告げた。

「こうして長いあいだ、お前の世話をすることになったのも、なにか前世で結ばれた縁えにしであろうと思う。が、いま、わたしの病はたいそう重いうえ、日一日と悪くなっている。わたしのいのちは、夕暮れを待たずに消える朝露のようなものだ。それで、お前のため、心を悩ましている。これまで、わたしがお前の世話をしてきた。わたしが死ねば、だれも、

お前の世話をして養ってくれる者がいないのではないか……かわいそうに！……ああ！  
このうき世ではいつも、願いごとはままならぬのだ」

藤太郎がこう言いおわるやいなや、鮫人は異様な苦痛にみちた叫び声をあげて、はげしく泣きはじめた。そうして泣くたびに、大きな血の涙が緑いろの目から流れ出し、黒い頬ほおをつたつて、床にしたたり落ちた。落ちるまで、それは血であった。が、落ちると、固まり、きらきらとかがやき、美しくなった！非常に貴重を宝玉、まっ赤な炎のようにきらめく紅玉ルビーになった。海に棲む者が泣けば、涙は宝石になるのである。

そこで藤太郎は、この不思議なできごとを見て、驚きかつよろこびのあまり、からだに力がよみがえってきた。彼は床とこからとび起き、鮫人の涙をひろって数えはじめ、同時に叫びつづけた、「病気はなおった！ 死なないぞ！ 死なないぞ！」

すると、鮫人は非常におどろいて、泣くのをやめ、藤太郎にそのように不思議に癒なおつ



たわけを訊たずねた。藤太郎は、三井寺で見かけた若い娘ひとのこと、そしてその娘の家族が法外な結納ゆいのうを要求していることを教えた。「とても一万もの宝玉を手に入れられるとは考えられなかったので、この求婚は絶望としか思えなかった。それでわたしは、ひどく気が滅入めいって、とうとう病気になったのだ。が、お前がいま、思うさま泣いてくれたので、たくさんの宝石が手にはいった。これであの娘ひととも結婚できると思う。ただ——宝石がまだ足りないのだ。頼むから、もうすこし泣いてくれまいか、必要なだけの数がそろうように」

だが、この要求に対し鮫人は、くびを振って、いくらか驚きとがめる調子で答えた

「わたくしが、娼婦しょうふのように——いつでも好きなききに泣けるとお考えですか。いや、

いや！ 娼婦は、男をだますために涙を流します。が、海の生き物は、ほんとうに悲しまずに、泣くことはできません。わたくしが、いま泣きましたのは、あなたが亡なくなられる

と、思つて、心からほんとうに悲しく感じたからです。でも、ご病気がなおったといわれた以上、もう泣くことはできません」

「それでは、どうすればいいのか」と、訴えるように藤太郎は訊ねた。「一万の宝玉が手にはいらないと、あの娘と結婚できないのだ！」

鮫人はしばらく、考えこんでいるかのように、黙っていた。それからこういった

「お聞きください！ 今日にはもう、どうしても泣けません。でもあした、酒とさかなをもつて、ごいっしょに瀬田の長橋にまいりましょう。しばらく橋の上でやすんで、いっしょに酒を飲みさかなを食べながら、はるか童宮のほうをながめて、そこで過した楽しい日々ふるさとのことを思い出し、故郷をおもう心になれば——そうすれば、わたくしも泣くことができましよう」

藤太郎は、よろこんで同意した。

あくる朝、二人は酒やさかなをたくさんたずさえて、瀬田の橋へ行き、そこに腰を落ちつけて、宴を張った。しこたま酒を飲んでから、鮫人は竜宮のほうをじっと見つめて、過去を思い出しはじめた。するとしだいに、酒の力で心がやわらぎ、楽しい日々のことが思い出されて、悲しみで胸がいっぱいになり、望郷の思いにかられるあまり、さめざめと泣くことができた。そして、彼の流した大きな赤い涙は、ルビー紅玉の雨となって、橋のうえに落ちた。藤太郎は、落ちてくるものを拾いあつめて、それらを手箱のなかへ入れ、数えてみると、もう一万もの数にたっしていた。そこで彼は、よろこびの叫び声をあげた。

ほとんどそれと同時に、はるか湖上のかなたから、たのしい楽がくの音が聞えてきた。そして沖のほうに、なにか雲のかたちをした、あかねいろ茜色の宮殿が、ゆっくり水面に浮び上がってきた。

すると、鮫人はたちまち橋の欄干のうえに跳びあがって、それをながめ、よろこびのあ

まり声をあげて笑った。それから、藤太郎のほうに向っていった――

「童宮国に大赦たいしやがあつたにちがいありません。王様たちは、わたくしを呼んでおられま  
す。それでただちに、お別れをいたさなければなりません。あなたのご厚意に、いくぶん  
なりとお返しする機会を得て、うれしく存じます」

こういつて彼は、橋から跳びおりた。それから二度と、彼のすがたを見た者はなかった。

そして、藤太郎は、珠名の両親に紅玉の箱をおくつて、彼女を妻にむかえた。